

# コンプライアンスとモチベーション

2012.2.19 東京定例会  
藤坂龍司

## 1. コンプライアンス

### (1) コンプライアンスの意義

コンプライアンス (compliance) とは「指示に従う姿勢」「従順さ」のこと。

ロバース博士のABA早期集中介入(ロバース法)の、他のABAにない大きな特徴の一つは、コンプライアンスの確立をとっても重視することである。

ロバース法では、セラピー初期にコンプライアンスを徹底的に鍛える。子どもの課題が進んでいくにつれて、子どもの自由度を増して行くが、初期においては大人の指示は絶対である。

コンプライアンス重視の姿勢は、ロバース法が他のABAよりも高い改善効果を上げている原因の一つかもしれない。

#### <嫌悪刺激からの転換>

ロバース博士は、初期(1960年代~70年代)においてはセラピー中の問題行動を抑制するために、大声で「NO!」と叫んだり、太ももを平手打ちする、という方法を取っていた。

しかしそれに対しては批判が強かったため方針を転換し、嫌悪刺激を用いずにコンプライアンスを確保するようになった。

その方法は主に消去とDROである。たたかれたり、髪を引っ張られたりしても大丈夫のように身体にプロテクターをつけたり、シャンプーハットを被ったりする。それと同時に、プロンプトして指示に従わせ、成功させてはふんだんに強化する。それによって子どもを適切な行動に誘導するのである。

### (2) セラピー中のコンプライアンス確保法

#### <できるはずの指示に従わない場合>

身体を抑えて、最初期の課題(「入れて」)に戻り、プロンプト付きで1試行させては解放、を繰り返す。

まず子どもを背中から抱えて、足をハの字にして床にすわる。

子どもを股のところにしっかりひきつけて床に座らせ、同じく足をハの字にさせる(図参照)。

右腕で子どもの腰を自分の下腹部にぐっと引きつけるのがコツ。

次に左手におわんを持ち、腕で子どものおなかを押さえながらおわんを子どもの前にかざす。右手で小さなつまきをあなたの右ひざに置き、子どもの右手を取って、無理にでもつまきを握らせ、おわんの中に入れさせる。

入れたら、すぐに解放する。

20秒くらい自由にさせてから、また子どもを連れてきて子どもが自発的につまきを入れるまで同じ手続きを繰り返す。



最初はつまきを一個入れるたびに解放するが、徐々に2～5個入れてから解放するようにする。

子どもの抵抗が和らいできたら、いすに座らせて向かい合い、同じ課題を行なう。

子どもがさらに落ち着いてきたら、お菓子などの強化子を提示して、受け入れるかどうかを試す。

子どもが強化子を投げてしまうようなら、再び解放だけを強化子にする。

子どもがよく指示に答えるようになったら、マッチング、動作模倣、音声指示などの初期課題に戻る。

さらに協力的になれば、現在の課題に戻る。

途中でコンプライアンスが崩れたら、何度でも最初期に戻って同じ手続きを繰り返す。

この方法は、高機能児のコンプライアンス確保にも有効である。

ポイントは

- ・子どもが抵抗しても身体的にプロンプトできる課題を選ぶ（表出課題は不可）。
- ・子どもの身体をしっかり抑えて、逃げ出せないようにする（ただし強くしすぎないように）。
- ・最初のごほうびを拒否するので、解放（親の場合は抱っこも可）を強化子にする。
- ・感情を見せずに、クールに行なうこと。
- ・余計な声かけはしない。協力的になるまではほめ言葉も不要。

<いすから逃げ出す子ども>

両足を伸ばして、いすをはさむようにする。テーブルを使う場合はテーブルを子どものおなかのそばまで近づけて、簡単に立てないようにする。

テーブルを使わない場合は、子どものひざに軽く手を置くか、ひざのそばに手をかざし、子どもが経とうとしたらすかさずひざの付け根を抑える。

立ちかけてから引きもどすのは大変。腰が浮く前にすばやく止めることによって、抵抗少なくいすに留めることができる。

立とうとする行動は立てることによって強化される。立とうとする行動を未然に防止することによって立とうとする行動を消去できる。

<教材を投げる子ども>

テーブルの中央やや大人側寄りに教材を並べ、その前（子ども側）に大人の手をだらんと出しておく。

子どもが手を出してきたら、その手ですかさず払う。強化子を取ろうとして目を離したときや、強化子を与えた後に投げられやすいので、油断しないこと。

こちらが油断せず、子どもに勝たせないようにすることで抵抗（いたずら）行動を消去することができる。

投げられてしまったら仕方ないので、せめて無視をする。取りに行ったり、取りに行かせたりしないで、別の教材でしばらく課題を続ける。教材がなければ音声指示でもすればよい。1分以上課題を続けてから休憩させて、その間に教材を取りに行く。

<たたいてくる子ども>

子どもに向けて手をまっすぐに伸ばす。大人のリーチの方が長いので、こうすると子どもの手は大人の頭や胴には届かない。手はやられるが、がまんする。長そでは着ておいた方がよい。

それでは防ぎきれない場合は立ち上がる。そうすれば子どもの手は上半身まで届かない。長ズボンは履いておいた方がよい。

### (3) 日常生活におけるコンプライアンス確保法

#### <指示に従わない子ども>

大人の指示をスルーしてしまう場合は、子どものそばに行き、身体を止めるか遊んでいるものを取り上げて、もう一度指示を出す。決して何度も指示を出したりしてはいけない。指示を空振りすればするほど、指示の力は弱くなる。

その一方で一度で指示に従えたら、気持ちを込めてほめたり、ごほうびを与えるなどして強化することを忘れないように。

#### <指示は必要最小限に>

不要不急の指示を出さない。どうしても従わせたいときだけ、指示を出す。その代りその指示には必ず従わせる。

手が離せない用事があって、子どものそばに行けない場合は、できるだけ指示を出さないようにする。子どもが指示に従わなくても、そばに行きかかせることができないから。

#### <ほめる・しかるのメリハリをつける>

いいことができた時はほめる。悪いことをした時は叱る。このメリハリをはっきりさせる。ほめるときは、小声でも気持ちを込めて。身体にやさしくタッチしながらほめるとなおよい。

叱るときは、子どもがびくっとするくらい大声で鋭く叱る。くどくど言い聞かせるのは逆効果。

ただ、叱るだけでは効果は限られる。おもちゃを取り上げる、テレビを消す、その場で1分間、体を拘束する、壁に向かって立たせるなど、何か子どもにとって嫌な事態を（毎回でなくても）伴わせるとよい。

#### <生命に危険がある場合>

道に飛び出すなど、生命に危険があるような場面で指示に従わせることを教えるときは、指示に従わない場合に、罰として、たたくこともやむを得ないと思う。その場合は下半身に限定すること。例えば半ズボンをはかせて、むき出しの太ももを平手で強くたたきようにすると効果がある。「だめ！」と強く行って、一回パシッとたたく。

#### <むやみに叱らない>

叱りすぎると叱り慣れしてしまって、効き目が弱くなる。叱ることの効果を保つためにも、叱るのは必要最小限に留めること。

感情で叱らないこと。冷静に、効果を考えて叱る。

些細なことまで気にすると、四六時中叱ってしまう。大目に見る範囲をできるだけ広げて、「これは絶対ダメ」という領域だけ、叱るようにする。

#### <悪いところばかり見ない。いいところを見る>

子どもの悪い面ばかり見ると、ついつい叱りたくなる。叱られると、子どもの情緒が悪化し、ますます問題行動がひどくなる。悪循環である。

子どもの悪い面に注目するのではなく、よい面に注目する癖をつけよう。そうすればほめたくなる。ほめられれば子どももうれしく、情緒も安定するから、問題行動も自然に減ってくる。よい循環に持っていこう。

#### (4) モチベーションの確保

ロバース法がコンプライアンスを重視し、デスクでのセラピーを中心に据えるのに対して、ケーゲル博士のPRTはモチベーション（やる気）を重視し、遊び場面などの自由な環境での働きかけを中心に据える。ケーゲル博士によれば、ロバース法は子どもが受け身になり、モチベーションを高めることができない、という。

しかしそうだろうか。ディスクリート・トライアルはしばしば単調でうんざりさせられるが、そこでは短時間に集中してランダムな試行が繰り返されるため、新しい概念の獲得が早い。それは子どもに新しいことを学べたという満足感や自信を与えるはずである。

おしゃべりをしながらの自由な練習が、楽しいけれどあまり上達しないのに対して、統率のとれた厳しい練習は、逃げ出したいときもあるけれど、確かに上達した、という満足感が得られる。それと似ていないだろうか。

しかしいずれにしても、セラピー中にモチベーションを高める工夫は、コンプライアンスを維持するためにも必要である。

##### <セラピー中にモチベーションを高める工夫>

○成功率を7～8割程度に保つ。

失敗が続くと強化が得られないので、誰でも嫌になる。プロンプトを多くする、得意な複数課題を混ぜるなどして、正解率を7～8割に保とう。

○強化をピンポイントで

トークンを使うと、トークンの数だけ試行をしてから大きな強化、と、強化子が定期便になってしまう。そうすると一度もらおうとしばらくもらえないことが分かっているので、モチベーションが下がってしまう。それよりもトークンを使わず、毎回ほめて、時々不定期に強化子がもらえるようにする。そうすると、ここぞというときにタイミングよく大きな強化ができ、モチベーションも高まるはず。

仕事をするときでも、自分が「やったぞ」と思うときに周りから認められるとすごくうれしいはず。子どもも同じ。「やったぞ」という瞬間に大きな強化子をピンポイントで与えることが大切。

○活動的な課題を取り入れる

すわってする課題ばかりだと、子どもも不活発になって飽きやすい。時々、立ってする課題を取り入れて、気分転換を図るとよい。立ってする動作模倣、「これ、取ってきて」（逆マッチングの応用）、「○取ってきて」、位置（自分がその位置に行く）など。

○よくできた時は早く終わる

セラピー時間を固定するのではなく、子どもが協力的でよくできた時は早めに終わり、子どもが非協力だったり、だれているときは長めにする。セラピーの終了も強化子として有効に使う、というわけ。